



心の世紀に向けての産業保健

情報広報部 小山 司

平成16年4月、北海道医師会常任理事を拝命し、産業保健部を担当することになった折りに、何かの会報に同じタイトルでご挨拶申し上げたことがある。就任1年を過ぎた今、改めてこのテーマを取り上げることにする。

いまや世は混迷の極に至ろうとする観がある。世界に目を向けると、地球環境問題から民族紛争、宗教対立、そして世界を震撼しつつあるテロ事件、日本国内では家庭内暴力から始まって教育現場の破壊、若者による衝動的な殺傷事件、またおとなの世界では政・官・財にわたる不正事件など数多くの諸問題が山積みになっている。21世紀が“心の世紀”と声高く強調される所以であろう。そこには個や物質のレベルを超えた人類共通の知恵が求められているといっても過言ではない。

近年の労働者の健康をめぐる状況もまた重大な局面にある。産業構造と労働態様の変化、不況、高齢化の進展など労働者を取り巻く環境が変化するなか、中高年を中心とした生活習慣病を有する労働者の増加や、疲労ストレスなど様々な問題が生じており、産業保健の重要性はますます増大していくものと思われる。なかでも、わが国における自殺の現状は深刻である。周知のとおり、わが国の自殺者数は平成9年の23,494人から平成10年に31,775人と急増し、現在まで7年連続で3万人を上回っている。特に注目すべきは、自殺率の増加は男性中高年者(40~59歳)に顕著であり、若年者の自殺率が増加傾向の欧米とは異なったパターンを示していることと、被雇用者(管理職・労働者)の自殺も平成10年から毎年8,000人前後と高い数値が続いていることである。

うつ病が自殺の主要な危険因子のひとつであることはいうまでもない。したがって、うつ病の予防、早期診断・治療に関する地域や職場での取り組みこそが自殺防止の最善の方策と考えられる。国家レベルのうつ病対策として、米国のDepression / Awareness, Recognition and Treatment (D/ART) と、英国のDefeat Depression Campaign が有名である。これらの活動では、地域住民の啓発や相談サービス、スクリーニングの機会を提供するほか、一般診療科の医師や産業保健スタッフがうつ病を把握し、必要に応じて専門医を紹介できることを目的に、教育講演や医療機関同志の連携が推進され大きな成果をあげたといわれている。

このように、うつ病や自殺への対策は診療室の中だけでは成果をあげられるものではない。ある高名な英国の精神科医は“Psychiatry in the Public Health Arena”という言葉のスローガンとして提唱している。精神医学が診療室の中だけでなく、地域・職場、一般診療科に積極的に関わって、心の世紀とよばれる21世紀の心の産業保健活動に挑戦していくことが期待されているのである。

日医認定産業医制度は、平成2年4月、産業医の資質向上と地域保健活動の一環である産業医活動の振興を目的に発足した。15年を経過した今、多くの医師が認定を受けていることは周知の事実である。また、労働安全衛生法では、産業医の専門性の維持を目的に、産業医選任の条件のひとつに日医認定産業医制度の基礎研修修了者であることが明記されている(平成10年10月1日施行)。このため、産業医に関する各種研修会の受講者が急増して現在に至っている。

心の世紀に向けての産業保健活動を考えるうえで様々な課題があげられるが、基本課題として産業医の専門性とネットワークの構築・強化が重要と思われる。これまでも研修内容にメンタルヘルスについての講演やワークショップを取り入れるなど様々な工夫が行われてきたが、より多様なメニューの試行が望まれる。また各地域産業保健センターにおける産業医と精神科医とのネットワークづくりは早急に実現すべき課題である。日医認定産業医である会員諸先生こそが心の世紀の産業保健の牽引車であると確信するものである。